



近江の石造道標

近江は、地形的に西日本と東日本の接点にあたり、古代より東海道、東山道(中山道)、北国街道といった日本の大道が近江に集中しています。時代がさがるにしたがって、これらの街道を中心に多くの間道(抜け道、近道)が発達しました。この道の分岐点、曲り角などに地蔵菩薩像、常夜灯、庚申塔、石造道標が建てられていることをよく見かけます。ここでは過年調査した 524基の石造道標を中心に、その造立年代、形式、行き先、造立者などについて見ていくことにします。

路傍に立つ道標には、すぐ・左・右・是より・東・西・南・北・矢印・手で示すものな



石造道標 米原町米原

どの方向指示と行き先、目的地までの道程が刻まれています。道標は道を往来する人々の道案内のために建てられたもので、その機能面からみますと、現在の道路標識にあたるといえます。

造立年代

道標の発生を考える場合に、1町ごとに石標を建て、目的地までの路離を順次明示した町石があります。在銘最古は三重県上野市の建長5年(1253)の町石、そのあと有名な高野山の町石群があります。これらの町石からおよそ 400年遅れて道標が発生しています。

現在私の知るかぎりでは、日本最古の道標は池田市にある寛文10年(1670)です。近江で最も古いのは、草津市の立木神社境内にある延宝8年(1680)の道標。これには「みぎはとうかいどういせみち ひだりは中せんとうをた加みち」とあり、かつては東海道と中山道の分岐点にあったものと思われます。刻まれた文字に伊勢、多賀といった当時庶民信仰を集めた場所があるのは注目されます。これに続くものとして元禄12年(1699)の「北是より西 竹生嶋ミち尾江村=船」とある道標で、湖北町の北国街道から竹生島へ通じる道の接点にあります。

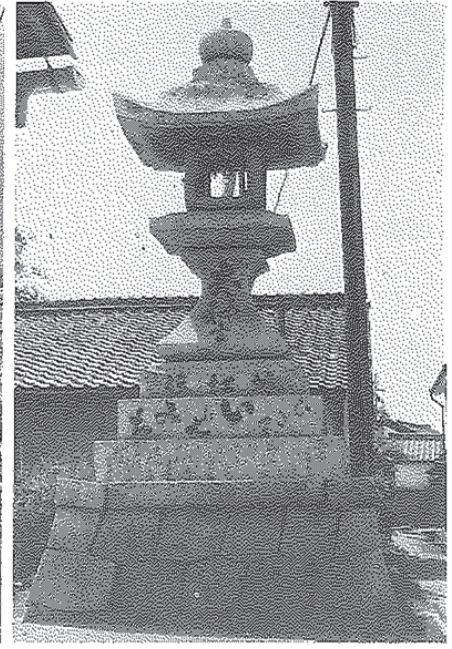
紀年銘別	基数
延宝	1
元禄	12
宝永	1
享保	8
元文	2
寛保	1
延享	3
宝暦	9
明和	3
安永	4
天明	6
寛政	2
享和	3
文化	15
文政	12
天保	26
弘化	9
嘉永	5
安政	6
文久	2
慶応	1
明治	42



方柱型——浅井町野村



方柱型——志賀町北比良



常夜灯型——近江八幡市金剛寺町

近江の道標のうち造立年代のあるのは、3分の1にあたる172基だけです。しかもそのほとんどが別表で示したように文化・文政・天保に集中しています。この時期は全国各地の商品生産力が向上し、貨幣の流通を促したときでもあります。この経済力を背景に交通網が発達し、庶民の行動が活発化し、情報の伝播につれて社寺参詣を中心とした旅が盛んになったわけです。また、石材を自由に運び加工する技術も発達し、庶民の発願によって石造道標をはじめ地蔵菩薩像、石灯籠、常夜灯などの造立が激増しました。

道標の建てられた場所

近江は天下の回廊といわれているように琵琶湖をとり囲んで東海道、中山道、西近江路(北国海道)、北国街道をはじめ若狭街道、北国脇往還、八風街道、御代参街道、朝鮮人街道といった主要街道があります。この主要街道を中心に幾筋もの間道が縦横にはしっています。この街道と間道の発達によって、近江は典型的な盆地でありながら60を越す峠が存在し、伊賀、美濃、越前、若狭、京都にそれぞれ結ばれています。このような道の発達は、近江の地形的な条件はもちろんです、各地域とも早くから開けていたことを物語ってい

ます。

ところで、道標が建っている場所は、間道と間道を結ぶ接点に、半数以上にあたる288基もあります。いずれかの間道を進みますと、主要街道に出て目的地へ通ずることができ、その間に多くの間道や野道と交差していたわけです。たとえば、近江八幡市の間道には「右いせひの八日市むき道 すくくはんおんじ 浄ごんいんちかみち」とあり、大津市には「牛尾山観音道 すぐ通り抜け近みち 牛尾ヨリ山科御坊江二十一丁、三条大橋江六十丁、伏見船場江二里」といったように、道行く人に近道、抜け道を教え主要街道を出来るだけ通らずに、たえず目的地へ最短距離で結べるようにしています。まさに往来に対する庶民の知恵というべきでしょう。

間道と間道の接点に続いて多いのは、主要街道(先にのべた八街道)と間道の接点で109基あります。これも間道が目的地への近道になっています。そして主要街道の曲り角12基、主要街道と主要街道との接点10基となっています。そのほかの道標は、社寺、学校、公共施設などへ移転されています。

形式

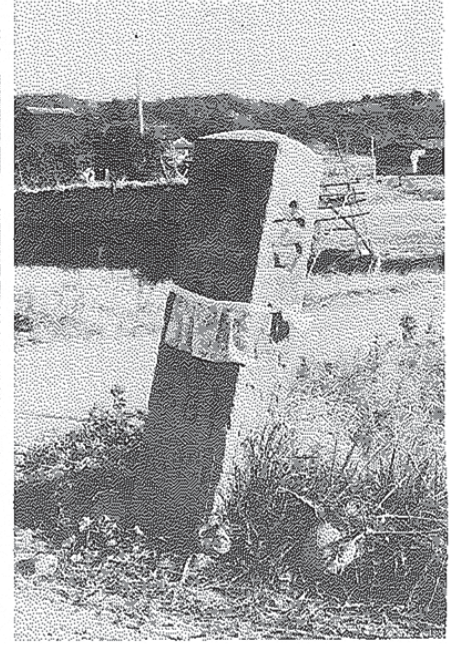
道標には、いろいろな形をしたものがあり



常夜灯型——蒲生町川合



地藏光背型——湖東町横溝



地藏光背型——日野町清田

ますが、その形状から方柱型、板碑型、地藏光背型、自然石型、常夜灯型、円形型と六種類に分けることができます。

1 方柱型 240基

この形式が最も多く道標の主流を占めています。その形状から角柱型ともいえますが、幅、奥行がほぼ同じ長さで、頂部が少し四角錐の形式をしているものをさします。これらの多くは3面に刻まれ、おもに街道と間道の分岐点、間道と間道の接点に建っています。

2 板碑型 64基

一般的に板碑といいますと三角状の頂部をもち、2条の切り込み、額部、身部などを備えています。ここでは、方柱型と区別するために幅に比べて奥行が少なく、頂部が三角状にとがっているものを示します。この形式には1面だけに刻まれているのが大部分です。

3 自然石型 44基

普通の自然石で、板碑型と同じく1面だけに刻まれている場合が多くあります。

4 地藏光背型 42基

石造の舟形光背をつけた浮彫りの地藏菩薩像の両側か、あるいは地藏菩薩像の上部に行き先を刻んでいるものをさします。この形状には舟形光背をもつ地藏菩薩像と、方柱型の

上部に地藏菩薩像をくり彫りした2種類があります。彫り込まれた仏像の大部分は地藏菩薩像ですが、なかには阿弥陀如来像、観音菩薩像、弘法大師像などもあります。

全国的にみても近江に道標を兼ねた地藏菩薩像が多いことは注目されます。元来地藏菩薩が道筋に多く存在することは、道の神である道祖神と深い関連があります。道祖神は、本来塞の神で集落の出入口、橋のたもとなどにあって悪霊を防ぐ神であり、当然集落を守り道行く人の安全を祈る神であったわけです。その意味から多くの諸仏の中で早くから庶民信仰の対象となった地藏菩薩が路傍の神として信仰され、木造以外の地藏菩薩像のほとんどが村境、峠、辻、橋のたもとなどに安置されたといえます。

こうして、路傍の地藏菩薩像は、往還する人びとの安全を祈り、道案内的な役目を果たしてきました。江戸時代の川柳に「たよりにき道は地藏もちからにて」「田舎道の地藏に聞て行く」とあります。地藏菩薩像は本来道案内の特性をもちながら、さらに行き先が刻まれたわけですから、地藏光背型道標は、道標の原型を示しているといえるでしょう。

5 常夜灯型 28基



自然石型——甲賀町櫛野

この型には宝珠、笠、火袋、中台、竝石、基礎、石垣をつけた本格的な常夜灯と、木製の火袋、中台、竝石、基礎をもった略式常夜灯、さらに方柱型の上部を四角にくり抜いた簡易な常夜灯の3種類があり

ます。この型の道標のほとんどが伊勢に通ずる道筋に集中し、太神宮の常夜灯と一連の関係があるといえるでしょう。

道標の示すおもな地名

1基の道標には、平均2か所以上の行き先(目標地)が刻まれている場合が多くあります。最も多い地名を順番にあげますと京、伊勢、日野、八日市、多賀、大津、北国、八幡、長命寺、水口、観音寺、谷汲、永源寺、元三大師、木之本、不動寺、石山寺、伊賀、信楽、櫛野、竹生島、山(田、野)道となっています。これをみても近江以外の京、伊勢、谷汲、北国、伊賀などが上位を占め、五街道の中でも主要な東海道・中山道が近江を貫通し、交通の要衝である近江の地理的位置をよく表わしています。

ところで、「京」すなわち京都を示す道標が65基もあり、京都が現在と同じように当時の庶民の旅の一大目標地であったことがうかがえます。三都の一つ京都は生産、商業の都市だけでなく著名な社寺をはじめ名所旧跡に富み、四季を通じて人々を魅了したことは容易に想像できます。京に次いで伊勢を示す道標が52基。伊勢参宮は中世から盛行し、近世には交通の諸条件の整備を背景に庶民の旅の浸透によって盛況を極めたことを道標がよく物語っています。とくに道順にあたる湖東・湖

南地域の間道に「いせ」を示す道標が集中し、いかに伊勢をめざした人々が多かったかを裏付けています。

また、巡礼を代表する西国三十三観音霊場として岩間寺(正法寺)、石山寺、三井寺、宝厳寺(竹生島)、長命寺、観音正寺の六か寺があります。これを示す道標の合計が74基となり最終札所谷汲山を入れると88基になります。これからも巡礼の盛行を示していますが、記録によれば、安永二年(1773)に湖西木津港から竹生島への渡船に乗った巡礼は、17,000人を数えているぐらいです。そのほか日野・八日市・八幡の3地域への道標が100基を越えています。この3地域はいずれも近江商人の発祥地であり、道標が行商する人々の便を果していたことがうかがえます。

造立者

道標524基のうち造立者が刻みこまれているのは3分の1にしかすぎません。そのうち造立者のおもなものをあげますと、個人としては施主、願主、発起人、寄付人、奉、寄進、追善など、団体としては社中、講元、仲間、有志などがあります。道標の建立は、前述のとおり道に迷わないために人を案内することにあります。京都のある道標に「京都無案内旅人のためにこれを立てる」とか「こたえなくてものいう此石は通行人のしおりともなれ」といった文字が刻まれています。その造立についても自発的な作善行為であり、一つの社会的な奉仕活動であったといえます。往来の人々に道標によって最短距離の間道を教え、目標地へ導くことが、庶民の共同体意識の一形態であったのでしょうか。道標は当時の庶民生活意識を物語る貴重な資料といえます。

しかし、近年これらの庶民の歴史を秘めた道標が、道路拡張、盗難などで消滅の危機に直面しています。近江の集落、むら、まちの生活の足跡を知るためにも、道標を大切に保存しなければならないと思います。

(木村至宏氏提供)